

第一章 大豊町のあらまし

一 位 置

本町は高知県の東北端四国山脈の中央に位し、北緯三十三度五十六分、東経百三十三度三十七分、北は愛媛県新宮村及び徳島県の山城町、東は西祖谷山村、東祖谷山村に接し、南は香美郡物部村、香北町及び土佐山田町に、西は長岡郡本山町に接している。

高知県に五十三の市町村があるが、一町で四国の二県に接しているのは本町のみである。

二 大豊町の発足

昭和二十八年町村合併促進法（昭和二十八年法律第二五八号）が施行されるに及び当地方にも合併促進の気運起り、当時の東豊永村長高木定盛、西豊永村長豊永利男、大杉村長秋山重実、天坪村長北村晴喜氏等が中心となってこれを推進、幾多の曲折を経て昭和三十年三月三十一日大豊村が発足した。

新しく発足した大豊村は右の四ヶ村が合体合併を行ったもので、面積三五九平方軒、人口二三、五七五人（昭和二十五年十月一日国勢調査人口）で県下町村中最大の規模を有するものであった。

同年四月初代村長に三谷泉水氏当選、つづいて五月村議会議員選挙が行われ二十八名の議席が決定した。

これより先旧天坪村南部五部落（穴内、檜谷、繁藤、北滝本及び河の川、面積三十九平方軒、人口一、六六四人）

は大豊村合併以前において旧天坪村より分離土佐山田町に合併を希望していた。大豊村発足以来町執行部、議会、住民をあげての説得もその甲斐なく、また一方大豊村合併後分村を認めるという当時の県の指導もあつて住民投票を実施することになった。その結果は絶対多数をもって分村が決定したのである。

余談ではあるが、住民投票は昭和三十一年二月十日繁藤小学校で行われ、万一を配慮した警察官七十余名の警戒、新聞記者十数名もつめかけるといふ緊張裡に行われたが、偶々翌十一日は旧紀元節であり、これを準備中の地元父兄、学校側の状況が新聞記者にキャッチされる所となり、一躍紀元節校長溝淵忠広氏の名が全国に喧伝されるきっかけともなった。

昭和四十七年四月一日町制を施行、高知県下で二十五番目の町として発足、人口一二、五六九人（同年四月一日現在）面積三二〇平方料である。南部五部落の分村があつたとはいえ、県下では中村市（面積三八七・八九平方料）につぐ面積を有している。

三 地 勢

本町は四国山脈を脊柱として逆三角形に南方へ突出した形をつくり、吉野川並にその支流穴内川、南小川、立川等に沿うて聳立する山岳地帯である。勿論平地は殆んどなく、部落は主として標高二〇〇米〜七〇〇米の急傾斜地帯に散在、耕地は所謂棚田、傾斜畑であつて、何れも平均して三〇〇米乃至一、〇〇〇米の通耕を要する。

四 山 系

四国山脈の起点ともいふべき剣山脈の西走する京柱峠（一、一五六・一）を経て黒滝山（一、二〇一）、野鹿池山（一、二九五）と阿波、土佐、伊予三ヶ国の国境接合点三傍示山（一、一五八）を経、更に椽尾山（一、一二三）、カガマシ山（一、三四三）を経て石槌山脈と接合する。支脈に工石山（一、五一六）、八丁山（一、〇八六）、国見山（一、〇八九）がある。

四国の屋根である石槌山系の東走するものは石槌山（一、九八一）をはじめとし、伊吹山（一、五二四）、瓶ヶ森山（一、八二四）、東黒森山（一、七三六）、伊予富士（一、七五六）、笹ヶ峰（一、一六〇）、平家平（一、六三三）、三森山（一、四三〇）、大座礼山（一、五八八）、玉取山（一、三三一）、大森山（一、四一六）、左々連尾山（一、四〇五）を経て前掲カガマシ山に接続して阿讃山脈に東走し、四国山脈の主軸をなし、屏風の如く聳立している。

これら四国山系の主軸をなす山岳は結晶片岩より成り、北辺の諸列は最も高峻である。其の南側に並走する古生層の山岳これにつぐ。主脈別子の西南に崛起する笹ヶ峰（一、八六〇）を最高点とする銅山川の南に連なるのは笹ヶ峰山脈でも一、〇一五米をこえ、岩層中に大小の銅鉱のあるのと相まって資源的にも重要な山脈である。

四国山系東部の地塊は吉野川横谷に沿うた土佐街道に沿い、その南では支谷穴内川から山田野地を経て物部川口に達する屈折した一線がその西界をなし、吉野川南岸を東走する古生層地帯の山岳では杖立山（一、一三六）を起し、近時高知県における名山として登山者の激増しつつある梶ヶ森（一、四〇〇）に接続し、支谷南小川に沿い東走して土阿国境の京柱峠を起し、祖谷鉱山の東に至って天狗塚（一、八二三）、三嶺（一、八九四）の高峻となっている。

この部分の岩層は秩父古生層の下部に属する緑色千枚岩を含み、結晶片岩との区別に困難なるものがある。南小

川によって東土居の河原に洪積されている緑色千枚岩の川石がこれを実証している。

吾が大豊町は是等石槌、剣両山系の交錯、隆起する峻嶺に囲繞された四国中央の山の町といえよう。

五 水 系

大豊町は山岳に囲まれた緑地帯で、春の花、秋の紅葉と四季とりどりの山岳美をもつが、また千古より変らぬ清澄鏡の如き吉野川及びその支谷の清流は、縦横に流れて山には珍らしい水郷でもある。

吉野川は吾が国の河川では坂東太郎、筑紫二郎に次ぎ四国三郎と称せられる四国随一の大河である。その源を遠く石槌山系の手箱山（一、八〇七）、瓶ヶ森（一、八九七）より発して土佐郡本川村境で高知県に入り、四国山脈に沿って大川村、土佐町、本山町、大豊町を東流し、徳島県山境町境谷にて徳島県に入る。土阿国境に進むに従い突如として北折し、四国脊梁山脈を水蝕して突破し、延長三〇料に亘る大步危、小歩危の大峡谷を穿ち、池田町において阿讃山脈に沿って東流する。

この間高知県においては本川村で大森川、大川村で大北川、瀬戸川、本山町にて下川、汗見川、森川、伊勢川、樫川、木能津川、行川、大豊町に入って立川、尾生川、穴内川、奥大田川、舟戸川、黒石川、南小川、三谷川その他の小谷を併せ、更に徳島県に入っては境谷川、伊予川、日開谷川、祖谷川、漆川、馬路川、松尾川、貞光川、穴吹川、鮎食川等大小一七七の支流を集めて、蜿々一九四料の大流となり、其の中流以下に亘っては三、七〇〇平方料の広大な扇状の大沖積吉野平野を開析している。

しかもこの流域は四国中央を縦走する結晶片岩帯の崩壊による土壌を堆積させたものであるから地味肥沃で全国稀有の沃地と知られ、遠く神代の時代より粟、麻等を栽培したことが歴史に明らかである。

六 地 質

(一) 長岡郡 太古大統結晶片岩（三波川帯）

本郡内において最も古き年代の岩層で吉野川流域以北の旧吉野村、田井村、本山町の北半分、旧大杉村、西豊永村の過半及び旧東豊永村の北部を占める。旧東豊永村附近は石墨千枚岩として現われ、旧吉野村桑の川附近は榴閃岩及び蛇紋岩として現われ、これより吉野川に達する区間には紅簾片岩が現われている。本岩層の主なる耕地は僅かに吉野川及びその支流たる汗見川、立川川の兩岸地帯にすぎずして、何れも礫質埴土から成る。

(二) 古生大統 秩父古生層（御荷鉢帯）

古生層は吉野川の支流である穴内川、南小川上中流の流域を包含した一帯で香美郡との境界線をはさんで带状に西西北に連なり、その南北の幅は国道三十二号線に沿い、旧久礼田村才谷、天行寺附近より大杉に至る間である。本岩層は結晶片岩の南に位し関東山系の大部分を構成する秩父系に属し、層位によりこれを上中下の三つに分ける。本岩層の分布せる範囲は旧東豊永村、旧天坪村、旧上倉村の殆んど全部と旧田井村、本山町、旧大杉村の南部を包含している。土性は穴内川上流地方、旧上倉村旧天坪村の穴内附近までは礫質埴土をなし、中流一帯は埴質礫土で南小川一帯は皆埴質礫土である。

1 秩父古生層下部（秩父累帯）

吉野川の南岸旧田井村より伊勢川嶺を越えて、高知に通ずる山路は古生層を貫ぬき、北部に石墨千枚岩、東々北より西々南に走り南に斜下し、結晶片岩中の石墨千枚岩は西々北の走向を示して北に傾き、この両者の間に不整合を示

す一条の石灰岩がはさまれている。これに次いで一条の緑色片岩状の輝岩がある。また杉部落附近の国道には輝岩が露出し、多少片状を呈するものや堅緻なるものが相接している。その中には一部集塊岩状を呈するものもある。

岩質は角閃片岩に類似し、緻密乃至細粒状で灰色若しくは淡緑色を呈し、時に暗緑色の緑泥質物は竹葉状をなして混入し、その量が多いときは全く暗緑色となっていることがある。

2 秩父古生層（上中部）

秩父古生層上中部の下端には、石英岩が存在している。旧大杉村の国道に沿うた小川の南方にはこの露出がある。

即ち緑灰色及び紅色の石英岩が急峻なる断崖をつくっている。是れに連続して粘板岩及び砂岩がある。また紅色及び緑色凝灰岩が、これについてその南方に現われている。

しかしてこの凝灰岩は更に西方である伊勢川嶺の南方において好露出をなし、それは紅色かつ厚板状に分離された性質となつて厚層を呈している。

（三）火山灰質土壌（音土又は俗に音地）

火山灰質土壌は、本邦第四紀古層の表面の大半を占め、畑地として利用し得る台地及び丘陵地の二分の一乃至三分の一を占有するものである。本県においては第四期古層の表面下一尺乃至一尺五寸の処に厚さ五寸乃至三尺の層をなし、容水量大、甚だしく輕鬆、且つ粘着力が弱い。土層を強く踏むか、叩けば柔らかい感じの音を発するところから、音土又はオンデと呼ばれている。

音土は乾燥すると粉末状で、黄褐色又は黄白色を呈するが、有機物を含んで黒色を呈するものもある。

(四) 大豊町内における音土分布

西峰、大平、大滝、大砂子、下桃園、寺内、奥大田、立川、和田

(五) 地質及び土性

大豊町の骨格を構成する地質は、本邦の地質構成上、最古の変成岩による大古大統に属する結晶片岩がその大部分を占める。これと並行してその南縁に、水成岩による古生大統に属する秩父古生層が一部分を成しているといえよう。

1 結晶片岩層

イ 区域

結晶片岩は九州の東端より起り、四国の中央部を経て、紀伊半島に連なるが、四国において最も大きく露出する。本県においては吾川、土佐、長岡三郡の北部を占め、吉野川の水源地をなすものである。

一般に地勢峻嶮にして、河流の沿岸は断崖絶壁をなし、平地は主に山腹に存在するも狭小である。殆んどが傾斜地で、山地に属するため耕地面積は僅少である。

ロ 土性

本岩層の土壌は、赤黄色埴土のものが多く、中に岩塊及び礫を混入するものが普通であつて、所謂礫質埴土をなす。表土の深さ三尺乃至六尺で本岩石に達する。

ハ 理化学的性状

埴土中に含まれる石礫含量が適度であること、表土層が容水量大なること、下層土が大気及び水分の透通が良好なることにより、植林、楮、三桠、桑の如き深根作物の栽培に最も適当するものである。

本町葛原土壤の枸橼酸可溶成分を分析した結果は、次の通りである。

水分四・五七%

満俺 痕跡

磷酸〇・〇一七%

硅酸〇・〇四六%

石灰〇・〇九七%

加里〇・〇五〇%

鉄礬〇・三二七% (酸化鉄礬土)

苦土〇・〇四九%

曹達〇・〇一一%

結晶片岩層は、一般に地形峻嶒なるため、耕地の如きも、多くは山腹急傾斜地の利用を余儀なくされるが、山地には植林、三椶等を栽培し、畑地には楮、桑、大麻、麦、キビ類、粟、稗、大豆、小豆、甘藷等を栽培する。稲作は溪流沿岸等、水利の便ある平坦地に行われるが、窒素及び加里の施用を特に必要とする。

2 古生層

イ 区域

古生層は結晶片岩地帯の南辺をなし、これと並行して、西々南より東々北に延び、高岡、吾川、土佐、長岡、香美各郡の中央部大半がこれに属する。本岩層露出区域は、広大な面積を有しながら、地形急峻のため耕地面積の割合は僅少である。

ロ 土性

土性は礫質埴土、埴質礫土、壤質礫土等で何れも岩片を混合して礫質壤土を構成している。

表土の深さは六尺以上に及ぶことが多く、畑地が利用の大部を占める。

ハ 理化学的性状

本土壤は赤黄色を帯び腐植質含量が少ないのにもかかわらず、窒素含量は割合に多い。磷酸、加里は中庸で、苦土石灰は何れも多く、窒素及び磷酸の吸収力は強大である。本町柚木における、土壌の枸橼酸溶解成分は次の通りである。

水分 六・一七%

苦土 〇・〇九六%

酸化鉄マンガン 〇・〇八三%

硅酸 〇・〇一九%

加里 〇・〇〇四%

石灰 〇・二五三%

酸化鉄礬土 〇・四八一%

曹達 〇・〇二八%

磷酸 〇・〇二八六%

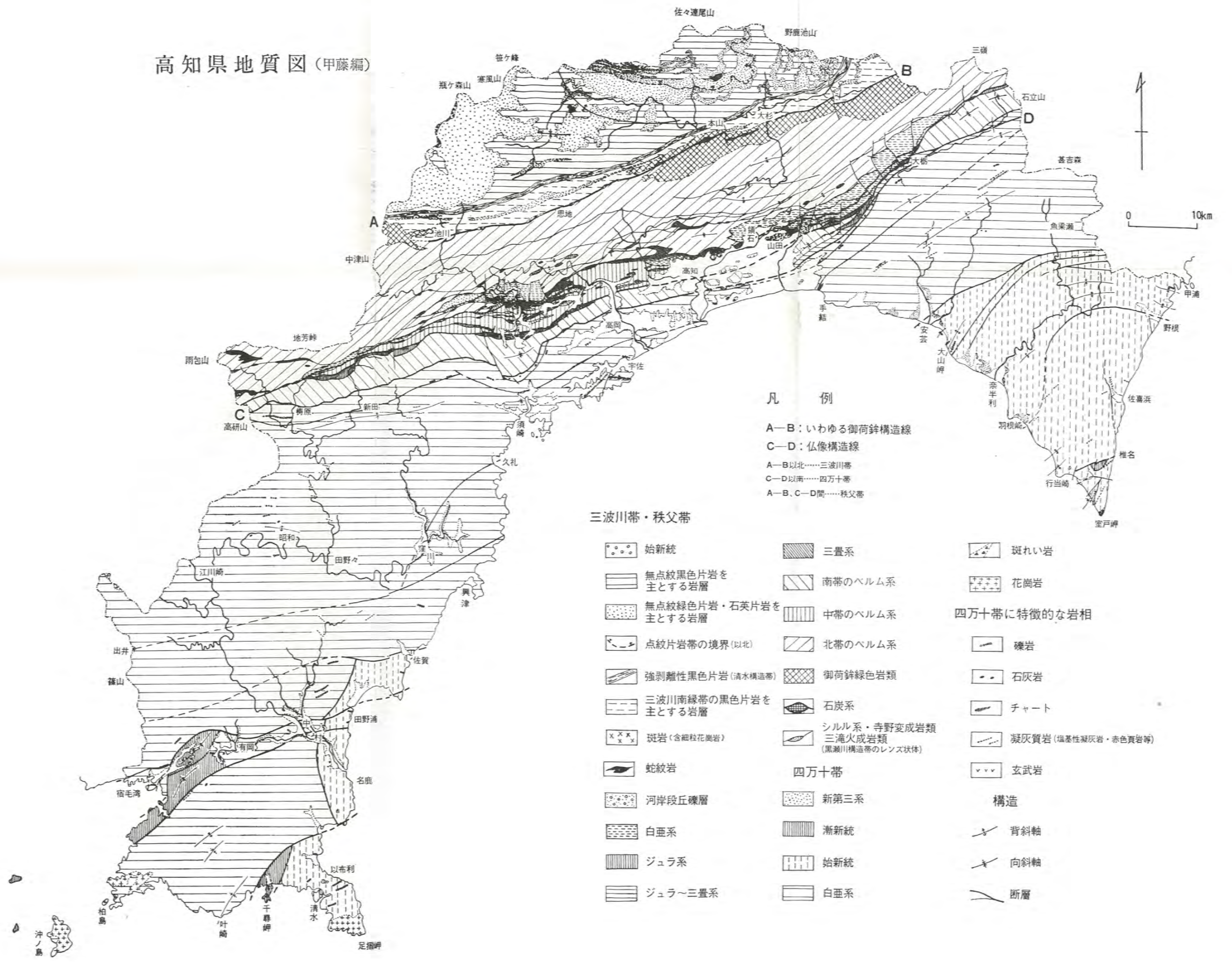
硫酸 〇・〇一八%

これによると弱酸可溶性の石灰は、比較的に他の成分よりも多量に溶解され、一方苦土、加里はその度が僅少であることを示している。

ニ 生産力

古生層地は一般に高峻で耕地少なく、氣候は海岸地の如く温暖でない。従って多く栽培されて来たものは三極、楮、麦、桑、煙草、甘藷、黍雜穀を主とし、三極の如きは古生層一帯に栽培せられ、品質も良好である。本町柚の木地区一帯は殆んど壤質砂土に属し、所謂沃土ではないが理学的に煙草の最適地である。

高知県地質図(甲藤編)



凡 例

A—B: いわゆる御荷鉾構造線
 C—D: 仏像構造線
 A—B以北……三波川帯
 C—D以南……四万十帯
 A—B、C—D間……秩父帯

三波川帯・秩父帯

- | | | | |
|--|---------------------|-------------|---|
| | 始新統 | | 三畳系 |
| | 無点紋黒色片岩を主とする岩層 | | 南帯のヘルム系 |
| | 無点紋緑色片岩・石英片岩を主とする岩層 | | 中帯のヘルム系 |
| | 点紋片岩帯の境界(以北) | | 北帯のヘルム系 |
| | 強剥離性黒色片岩(清水構造帯) | | 御荷鉾緑色岩類 |
| | 三波川南緑帯の黒色片岩を主とする岩層 | | 石炭系 |
| | 斑岩(含細粒花崗岩) | | シルル系・寺野変成岩類
三滝火成岩類
(黒瀬川構造帯のレンズ状体) |
| | 蛇紋岩 | 四万十帯 | |
| | 河岸段丘礫層 | | 新第三系 |
| | 白亜系 | | 漸新統 |
| | ジュラ系 | | 始新統 |
| | ジュラ～三畳系 | | 白亜系 |

四万十帯に特徴的な岩相

- | | |
|-----------|--------------------|
| | 斑れい岩 |
| | 花崗岩 |
| | 礫岩 |
| | 石灰岩 |
| | チャート |
| | 凝灰質岩(塩基性凝灰岩・赤色頁岩等) |
| | 玄武岩 |
| 構造 | |
| | 背斜軸 |
| | 向斜軸 |
| | 断層 |

七 大豊町の地すべり

大豊町立川、中村大王から徳島県東西祖谷山村、山城町へかけて、古来地すべり地帯として全国的にも有名である。近年は更に山林濫伐、国県町道、林道等の開発に伴い、地じりが頻発している。土讃線沿線だけでも、岩原、穴内、大志呂地すべり、また最近では繁藤災害等尊い人命が多数失われている。

地じりは相当昔から起りつつあったものと思われるが、最近昭和二十年九月の台風時の如きは、各所一斉に地じりの徴候を示した。

この時の降雨量は大豊町の場合、それ程驚くには足りない二〇〇ミリ程度のものであったが、至る処大小の地じりが頻発したのである。理學博士中村慶三郎氏はいふ。

地じりの原因について色々あるが、地質だけをみても弱化し易い所とそうでない所がある。このことは吉野川の支流南小川の兩岸を比較しても明らかである。この地域には右岸にも左岸にも多数の古い山崩れがあり、その崩土の堆積した緩斜面に集落がのっている。

処が右岸は大体黒色片岩の地層から成り、この地層自体も地じりを生じ易いのであるが、左岸に比べるとはるかに安定している。

左岸は御荷鈴層という岩層から成り変動地が多い。特に著しいのは西川、西



地じりの象徴 大杉の岩海

峰蔭の地すべりで、何れもかなり広大な範囲に亘っている。これ程の大きさになるとその動きを止めるのは並大てい
のことではない。西川、蔭部落共に南小川の河岸が崩れているが、移動の原因はるか遠い山手にある。従って山手
を放置して、沿岸部だけ押えても、効果は少ない。南小川の左岸に地じりの多いのは、一言で云えば御荷鉾の岩層は
軟弱で崩れ易く崩土に粘着が乏しいということである。(四国山脈より)

西川に大崩^{おおづえ}という処がある。その附近には今尚古木の根株を掘り出すことがある。往古の大地じりの跡であろう。
また東土居へ扇状地を作った大崩壊は、天神谷を堰きとめた水が東土居の氏神を超して流れたものであろうか、境内
に水成岩の円石がある。

八 気 象

本町は平野部と異なり、山岳地帯であるため、河川の上下、河岸と山腹、地勢と方位により、気象に著しい差異があ
る。また山岳によって囲繞されているから、風当りは平地より緩やかである。北と南から来る季節風に対しては、南北
に隆起する四国山脈によって遮ぎられるため、吉野川に沿うて流れ、このため四季を通じて西北及び東北風が多い。
また夏、秋の時節には、台風が襲来するが山脈や地勢の関係で、風当りに強弱がある。主として中心が南方より九
州に向かい、その為高知県は中心通路となる。従って風水害、地じりの災害が多い。

太平洋の暖流は高知県の沿岸近くを北流するため、県として全国的にも気温が高く、南国土佐と称せられる。しか
し温暖にして湿潤な水蒸気を含む気流は、四国山脈の斜面に妨げられ、冷却されて多量の雨を降らせる。特に嶺北地
帯は県下でも多雨地帯で、高知市附近の年間雨量二、〇〇〇ミリに対し、大豊町は二、二〇〇乃至三、〇〇〇ミリに

達し、吉野川をはじめとして、河川のはん濫と地氾りの頻発を促がしている。

尚東豊永観測所の調査によると、つぎの通りとなっている。

最早降霜日 昭和十七年十月二十六日

最遅降霜日 昭和十九年十一月十八日

初雪（最早降雪日） 大正十四年十一月九日

〃（最遅降雪日） 大正十一年一月十五日

最高降雨量 昭和十年 三、〇九四ミリ

最低降雨量 昭和九年 一、六三六ミリ

平均気温最低 昭和六年 十五・八度

平均気温最高 昭和十二年 十七・〇度